

# 「災害のあと 震災のまえ」 その4

當眞嗣朗

「災害のあと　震災のまえ」

その4

「忘却？」

「そうだ。みんな苦しさを忘れるために餌を舐めている。こ

れから震災が来るかもしれないわけだからね。でも忘れるつ  
てことが必ずしも良いことではないからね。このままでは、  
いずれ、世界が何故、このようになってしまったかを、みん  
なが忘れてしまうだろう。だから餌が売れるという現実には

問題がある」

「でも、俺はこう思うんだ」。ツネコ姉さんが言つた。

「餌を舐めて苦しい現実から目を背けていたいヒトが大勢  
いるなら、それはそれで良いだろう。そして、その餌を売つ  
た資金で、忘却を防ぐためのなにかをつくれたらいいんじや  
ないか、と」

「忘却を防ぐためのなにか？」

「例えば、資料館のようなものとか」

「それは良い」。学者が笑つた。でも、すこし悲しい笑い方  
だった。確かに、忘れないために、忘れる餌を売るというの  
は、変な話だ、とノボルは思う。でも、それが現実なのだ。  
現実はいかなる場合も、直視しなければならない。姉は常に  
そう言つてゐる。

「実はね、君たちに頼みたいことがあるんだよ」と、学者が  
言つた。

ツネコ姉さんの表情が変わつた。

学者は懐中電灯を持つと、玄関でゴム製の長靴を履いた。

それは放射性物質を遮断する材質でつくられたもので、現在  
は品薄の状態になっている。ノボルはそう考えて多少、動搖  
した。もちろんノボルの家にもそれはあつた。しかしそれは  
主に姉が使うもので、彼に合うサイズのものはなかつた。放  
射能による汚染が深刻な日本と違つて、沖縄は汚染の程度が  
低いのだ。

「キミもこれを履く必要がある」と、学者が言つた。それか

ら彼はゴム製のレインコートを羽織った。「ずいぶん大き過ぎると思うが、それしかないんでね。不自由は我慢してほしい」。そう言われて差し出された長靴とレインコートは、どちらも大人向けの大きなサイズのものだった。「文句は言うな。俺は逆にきついんだよ」。身体の大きなツネコ姉さんはそれさえも窮屈らしい。すべての装備を終えると、まるで未来の

宇宙服を着た宇宙人のように見えた。彼女は苦笑いを口元に浮かべつつ、弟がレインコートを羽織るのを手伝ってくれた。それから自動小銃を手にした。

「これから学者が案内してくれる場所は、心地よい場所ではない。むしろ不快な気持ちになるだろう。そこから窺える光景にお前は衝撃を受けて凍りつくかもしない。しかしつかりと見ておくことだ。それは人類の進歩の負の部分だからだ。そこから目を逸らすことは今の世界を否定することと一緒なんだよ」

姉が険しい表情でそう言って、わけも判らずぼんやりしているノボルの肩に手を置いた。まるで死から逃れようとする病気の人間に、覚悟を求めるような態度だ。ノボルは胸に不安が兆すのを感じて、身体を静かに震わせた。もちろんそれで覚悟が決まるわけもなく、ただ重苦しい恐怖を感じただけだった。

「そこには、何があるの?」。弟は姉の目を覗き込んで、それを羽織っているせいで、身体の芯は熱を保っていた。姿の見えない虫たちは、どこかで自己の存在を訴えていたが、その鳴き声は不快な響きしか持つていなかつた。虫たちは旧世界のように、季節を感じさせる心地よい響きで鳴いてはくれない。彼らは狂気のように鳴くのだ。

「そこには、俺たち【飴売り】が知らなければならぬ秘密がある」。ツネコ姉さんが言つた。その声はノボルに死と向

き合う覚悟を強いていた。

巨大な岩に挟まれた細い道を三人は進んだ。足元は砂地で、歩を運ぶたびにゴム底の靴が小気味よく音をたてた。長靴の大過ぎるノボルは先を行く二人に遅れまいと必死だった。

しかしそれでも歩が遅れ、そのたびに一人は立ち止まって振り返り、彼が追いつくのを待つてくれた。しばらく往くと洞窟があった。その穴は太古の世界を生きた巨大な生き物の棲家といった感じで、見上げるほどに巨大だった。内部の闇は

深く、懐中電灯で先を示しても、その明かりが闇の全体像を照らし出すことがなかった。空気が対流する音が悪魔の不気味なため息のように聞こえる。ノボルは塊のような唾液を喉の奥へと押し込んだ。

「ここは地下世界の人間の住処だ」と、学者が言った。懐中

電灯の明かりに照らされて暗闇に浮かぶその瞳は、生きる意志をうしなった人間の絶望に満ちていた。口元は微かにも弛んでおらず、ただひたすらに厳しさだけを表している。

つた。

「地下世界?」。ノボルはその言葉をはじめて耳にして戸惑つた。まるで古代帝国の遺跡と同等の響きしか持たない言葉だ。もしくは旧世界で書かれた物語の舞台のようでもある。

「ぼくたちが生きている世界の足元に、別の世界があるというの?」。ノボルは好奇心というよりも、脅えを含んだ声で聞いた。

「地下世界というのは、ただの呼称だよ。旧世界で旧西側諸国を第一世界、旧東側諸国を第二世界、それ以外を第三世界と呼んだのと同様の意味で使われているものだ。そこに地底人の世界があるわけじゃない。そこに住んでいるのは我々と同じ人間だよ」

学者がそう説明するとノボルは軽い困惑を覚えて眉間に皺寄せた。

「人間が地下に住めるの?」

素朴な問いをぶつけると、学者と姉の間に重たい沈黙が生じた。それは鉛を混ぜた空気のようで、そこだけが異常な質量を生じさせていた。やがて沈黙が薄れたところで、姉が言

「彼らは自ら望んでそこに住みはじめたわけじゃない。それは旧世界の政府がおこなつた一種の隔離政策だった。彼らは真実だけを運命のように背負わされて、地下に閉じ込められたんだ」

それからツネコ姉さんは言つた。

「そこに飴の秘密が隠されている」

「どうしてこんな所に人工の空間があるの？ それにこの粘り気はなに？」

ノボルは堪えきれずに言つた。多くを語ろうとしない学者と姉に対して不満が膨れあがつていた。

懷中電灯の決して充分とはいえない明かりを頼りに、暗闇に閉ざされた洞窟を先へ先へと進みはじめた三人は、やがてやわらかな砂地だった地面が固い感触に変わったのを感じた。懷中電灯の明かりに照らされた足元には、白く平らな地面が広がっていた。それは全体的に白いものの、部分的に茶色く汚れていた。どうやらそれがコンクリートで舗装された地面だと気付くのに、ノボルはそれほどの時間を要さなかつた。それはここが人工物だという意味していた。何故、こんな洞窟のなかにヒトの手によって造られた空間があるのか？ ノボルは事実をうまく理解することができなかつた。しかしそれ以上に彼の理解を拒んだのは、地面にべつとりと

貼りついた透明な糊のようなものだつた。それはゴム底の足を持ちあげると、抗うようにして粘着質の粘り気を伸ばした。歩行が困難になるほどではないが、その感触は彼を苛立たせるのに充分だつた。

学者の態度は淡々としたものだつた。「この辺りまで来れば大丈夫だろう」。その問いには答えず、立ち止まると、懷中電灯の明かりで、やはり人工物の壁を照らした。しばらく明かりをうろつかせて、そこにスイッチの所在を確認すると、そのレバーを上へと押し上げた。しかし何かが生じる気配はなかつた。ただ暗闇が、沈黙を吐息のように吐き出し続けているだけだ。学者はしばらくの間、そのスイッチを上げたり下げたりしていた。が、諦めて、そこから僅かに離れた場所にあるパネルを開いた。

「先日、来たときは作動したんだが、おそらく【干涉波】のせいだろ。あれは電子回路の機能を麻痺させる。なにしろ随分、古い施設だからね」

そう言いながら学者はパネル内部の無数のスイッチを入れたり切ったりしていた。しかし何も生じない。「仕方ない、補助用の原動機を動かそう。化石燃料を消費するから、なるべく使いたくないんだが」。学者はそう言つて、ツネコ姉さん

にパネルの脇にある冷蔵庫のような箱を指差した。姉がその箱の傍にある原動機のスターターを何度も引くと、それは重い音を立てて動きはじめた。それから学者がパネルのスイッチを入れると、周囲が明るくなつた。

まずノボルの視界に飛び込んできたのは、巨大なツララのような鍾乳石だった。それは地面へと狙いを定めて潜り込むドリルの刃先のように、その鋭い先端部分を地面へと向けて、そこから水滴を滴らせていた。それ以外にも鍾乳石は無数にあり、それらは大小それぞれに天井から垂れ下がり、見る者に神秘的な印象をあたえていた。よくこのなかの一つにぶつ

からなかつたな、と彼が感心して歩んできた道を振り返ると、そこだけが綺麗に整備されていて、安全策が講じられていた。しかしこの空間は、思うほどに巨大ではなかつた。広いと感じたのは暗闇が生じさせた錯覚だつたのだ。往く手にはコンクリートの壁があり、そこにはいかにも古い時代を感じさせる横開きの戸がついた入り口があつた。

「ここから先の空間が彼らの棲家だ」。ツネコ姉さんが言った。その聲音は多分の怖れを含んで強張っていた。まるで硬い石を口の中に詰め込まれたみたいだ。ノボルは自然と身体が強張るのを感じた。彼女の恐れが、身体の内側で複雑な迷路となつて広がつていて。ノボルはそこを彷徨いながら、タフな姉が怖れる何者かについて考えをめぐらせた。先を行く足取りは重く、その一步一歩が脅えを背負つていた。不安が重石となつて胸を圧迫する。先を行く二人の表情は、懐中電灯の明かりを受けて、歪んでいるように見える。固い決意を迫られて、憤つているようにも見える。ノボルは彼らの後に続いて、入り口の扉をくぐつた。

そこは異様な臭気に満ちていた。決して歓迎することでのきない臭いが、一定の濃度で空間を満たしていた。それは鼻孔の奥で固まりをつくり、粘膜に染み付き、その場に留まりつづけた。まるで腐敗の過程にある何かが、一時的にその進行を停滞させて、臭気だけを静かに増幅させているといった感じだった。その臭気はある感情を喚起させた。それは怒りだった。人目に触れない地下世界で、絶えることなく発生する、重く静かな、怒りの感情だった。ノボルは、全身の穴から体内へと流れ込むその感情に圧倒されて、入り口付近で歩を止めた。激しい運動をしたわけでもないのに呼吸が乱れていた。身体の内部に火が点き、全身が火照っているのに、背中や脇の下には冷たい汗が居座っていた。

「この臭いを不快だと思うかね？」学者は振り返りもせず、平坦な口調で一言問い合わせて、ノボルが答えを返すのを待たず、静かに顎を引いた。無理もない、と。その抑揚のない口調には、ある種の深みが深海の渓谷のように存在していた。しかしその深みは理性という名前の感情で埋められて、表面を凧の海面のように平坦に見せているのだ。その表皮の下には底知れない闇が確かに存在する。学者はその深みを内面に隠したまま、言葉をつづけた。

「確かに、これは耐え難い悪臭だよ。鼻が曲がるという言葉では表現できないくらい酷い臭いだね。生き物が腐敗するときの不快さを伴った臭いだ。臭いは人間の感覚を直接刺激する。そしてそれは精神を揺さぶる力を持つんだ。心地よい香りはヒトを穏やかな気持ちにさせるし、乱れた人心を安定させる効能を持つ。しかし不快な臭いはヒトの感情にはげしい負荷をかける。悪臭を嗅いだ途端、ヒトは咄嗟に表情をゆがめるだろう。そういう時、ヒトは精神が揺さぶられて安定性をうしない、憎悪だけを増幅させていくんだ。そして誰しも

その悪臭から逃れたいと考えるようになる。旧世界に於いて臭いは、人心をコントロールする恰好の材料だった。大企業にとつて臭い対策は絶好のビジネスチャンスだつたし、消費者もそれを喜んで受け入れた。人々は日々の暮らしから不快な臭いを徹底的に排除して、心地よい香りだけで満たそうとしたんだ。しかし人間は不快な臭いから逃れることはできなかつた。臭いをコントロールすることなんてできなかつたんだ。悪臭は人間の生活から生み出される廃棄物であり、それを無くすことは不可能だつたんだ。それは主に病気と老いを起点として発生したんだ。それは人間が高度な文明を築きあげたが故に生み出された苦悩だつたんだ。もちろん大企業は潤つた。臭いは常に別の臭いで隠蔽するしかなかつたからだ。しかしその心地よさを維持するためには、莫大な金がかかつた。そして病気と老いに苛まれた人々には、その金を捻出すことが困難だつたんだ。その結果、彼らは人々の生活圏から隔離されることになつたんだよ」

「隔離？」。その一言がノボルの鼓膜を重く振るわせた。そ

れは鋭利で冷たい響きを持った、ナイフのような言葉だつた。その刃は、ヒトの内面を器用に切り分け、あらゆる感情を個別に摘出するのだ。

「ここには、その病気と老いで隔離された人たちがいるの？」  
「それはただの例え話だよ。ここは別の事情を抱えた人たちの居場所だ。しかし問題の本質は同じところにある」

学者はそう言って、入り口の扉をくぐつた先にある別の扉の開閉レバーに手をかけた。二重の扉？ ノボルは眉間に皺を寄せた。それは、それだけ重要な何かがここに存在することを意味していた。

「判らないな。ここに住んでいる人たちは病気や老いではなく、別の理由で隔離されているということ？」

ノボルのその問いかけに、学者やツネコ姉さんは重量のある沈黙を返し、無言で意思を示した。見れば判る、彼らは閉じた唇の内側で、そう語つてゐるのだ。ノボルはまだ小さいから、大人の社会は難しくてよく理解できない。しかし今、彼の胸の内を満たしているのは、そんな二人にたいする苛立

ちだつた。言葉で説明するのは難しい。お前には理解できない。二人は自分を見下しているのだ。確かに、とノボルは考えた。ぼくはまだ幼い。甘いお菓子だって好きだ。しかし知りたいと願う好奇心を抑えることは困難なのだ。更に悪いことに姉の態度が、弟の不満を募らせた。飴の秘密がここにある。彼女は先刻、ノボルにそう言つた。しかしそれは言葉では語られず、見ることでしか得られない種類の知識なのだ。これまで姉は弟に、何でも詳しく説明してくれた。一人前の【飴売り】になるために必要なのは知識と教養だ。そう信じていたから、彼女はまだ幼く知識の乏しい弟の教育に力を注いできた。だからこそ既存の教育機関は信用しなかつたし、書物と自分の経験だけを重視した。しかし今、飴の秘密を目前にして彼女は、冷たい沈黙を決め込むのだ。ここから先は自分で経験するのだ、と。ならば、とノボルは覚悟を決めた。見るしかないのだ。

二重の扉を通過した後、その鼻を突く臭気は一層濃くなつた。まるで大気が質量を増して、身体の内側へと沈み込んで

いくみたいだつた。外部の暗闇は遠ざけられ、内部には適度な光が満たされていた。天井や壁に備え付けられた照明器具が、その役割を真摯に果たしているのだ。辿り着いたその部屋は、ノボルが想像する以上の広さを持つていた。それはツネコ姉さんの書斎で知識を得た学校の教室程度の広さだった。適度な数の机や椅子があり、ロッカーがあれば、それで一杯になつてしまふ程の。しかしどうやら天井は通常の建築物よりも低く造られているらしい。身長が百二十センチに満たないノボルにはさほど不便はないものの、男性以上に長身のツネコ姉さんには窮屈で、やや背を丸めなければならなかつた。そして彼は、それを目撃するのだつた。先を行く二人の身体の向こう側に、その光景は広がつていた。

その部屋は、ただの箱だつた。四方を固いコンクリートの壁が覆い、地面には排水溝のような穴が複数、空いている。ヒトが住まうような家具の類いは一切なかつた。生活に必要な道具さえなく、ましてやトイレや浴室もない。換気装置は作動しているようだが、この臭気を抜くには充分な役割を果

たしていない。

そこに複数のヒトが裸で横たわっていた。否、それを正確にヒトと呼ぶべきかどうか、ノボルには自信が持てなかつた。ヒトの姿を真似た進化の途上にある生き物なのかもしかなかつた。彼は現実と非現実の境が曖昧な状態で、その生き物と向かい合い、苦しげに呻いた。それは到底ヒトとは呼べないものであるよう思えた。まるでヒトの体を成していなかつたのだ。

づく